

## EMS からみたモンゴル遊牧社会の自然資源利用の変遷と持続可能性

本論文はモンゴル社会がなぜ、何千年も成立持続できたのか(持続可能性)について明らかにすると共に、モンゴル遊牧社会の中国化(清朝や近代中国政府における蒙地開墾)によって崩壊した要因は何か、何を喪失したのかを明らかにし、モンゴル遊牧社会の自然資源利用と持続可能性について環境マネジメント(以下 EMS と略)の観点から論じた。

近代化と環境破壊について歴史的事例を基に整理し、遊牧文明とモンゴルの自然環境について検討した。

清朝の歴代政府がモンゴルへの開墾政策を何故、どのように行ったかについて、文献調査を行った。更に、中華人民共和国になってからの内モンゴル自治区への開発政策が草原資源の劣化や環境破壊を招いたことについて、事例を挙げ検証した。

まず何千年もの間、持続し続けてきたモンゴル遊牧社会が何故、自然資源を劣化させ遊牧社会そのものまでも破壊することに至ったかを明らかにした。

すなわち清朝への政策開墾や近代中国の開発政策が何を破壊したかについてみると、1.漢人農民の入植、そして開墾がもたらした農耕の拡大と牧草他の縮小が必然的に家畜の密度を高め、過放牧が砂漠化を招いたこと。2.清朝の政治的思想や中国の近代化過程の中で推進された定着性策と開墾という農業政資源策は土壌の塩類化を招き、草原という最も重要な自然資源を破壊し、モンゴルの放牧という文化をも破壊したことが明らかになった。遊牧文明の理解と遊牧の持つ意味を明確にしたうえで、伝統的モンゴル遊牧社会制度、慣習、自然観がモンゴル遊牧社会に内包する EMS であると考え文献調査により立証を試みた。

その結果、それまでのモンゴル遊牧社会が何千年も維持できた条件は、EMS における要求事項、計画(P)、実施・運用(D)、点検・是正処置(C)、見直し(A)というデミングサイクルに合致するものであり、既にモンゴル遊牧社会に内包していた EMS そのものであった。